特集

平成15年度畜産大賞

―将来の方向性を示す受賞事例の概要―

表彰事例の普及による日本畜産の発展に期待

―審査の結果と評価の根拠―

中央全体審査委員会審査委員長　栗原　幸一

審査の結果と「大賞」選定の経過についてご報告申し上げます。

今年度審査の対象となった事例は、経営部門９事例、指導支援部門７事例、地域振興部門11事例、研究開発部門10事例であり、それらを合わせますと「畜産大賞」の選考対象は37事例になります。今年度は各部門とも審査対象事例数が前年度を上回り、全体で10事例の増加となりました。

選考の結果は、別掲の通り、畜産大賞は地域振興部門で最優秀賞を受賞しました鳥取県の大山乳業農業協同組合でありまして、「酪農家の心を食卓へ―生産から販売まで―」をテーマにした農協の活動事例であります。最優秀賞は経営部門が鹿児島県の藤岡数雄・藤岡美江子夫妻による「『低コスト化』追求で安定経営を築く子牛生産―楽しい牛飼い人生を息子たちに―」、指導支援部門が宮崎県の国富町による「町のリーダーシップで進む指導支援と多様な仕組みづくり―顔の見える農家小グループが担う飼料イネによる耕畜連携―」、研究開発部門が北海道立畜産試験場遺伝子診断応用研究グループによる「新規遺伝子増幅法（LAMP法）による牛受精卵性判別キットの研究開発」事例であります。

審査講評する栗原委員長

これらの事例の概要と評価の根拠となった特徴点を申し上げますと、次の通りであります。

まず、畜産大賞を受賞しました大山乳業農業協同組合による「酪農家の心を食卓へ―生産から販売まで―」についてです。大山乳業農業協同組合は、鳥取県全域の酪農家によって組織されている専門農協で、昭和41年にそれまであった伯耆酪農農業協同組合、美保酪農農業協同組合、鳥取東部酪農農業協同組合が合併して再発足した組織であります。

合併前の歴史はいずれも古く、昭和23年に農業協同組合法が制定・施行される前の任意組合時代にまでさかのぼります。発足以来、自ら牛乳処理プラントを運営し、現在では年間６万ｔ近くに及ぶ牛乳を処理・

平成15年度畜産大賞業績発表・表彰式（主催＝㈳中央畜産会、後援＝農林水産省、日本中央競馬会、㈶全国競馬・畜産振興会）が、1月19日、東京・港区の虎ノ門パストラルで畜産関係者、報道関係者ら多数の参集のもと盛大に開催された。この事業は、わが国畜産の各分野で成果をあげている事例を全国に求め、表彰するとともに、広く情報提供、普及することで畜産全体のレベルアップを図るのがねらい。6回目となる今回の受賞事例から畜産大賞・最優秀賞4事例の業績を紹介する。

加工し販売しています。

この事例が、今回「大賞」に値する事例として評価された点は、組織の歴史の古さでもなければ、県下全域を範囲とする組織の大きさでもありません。まさに「酪農家の心を食卓へ―生産から販売まで―」をモットーに消費者との絆を強め、消費者の信頼を基盤とした生産体制と販売ルートを確立したことにあります。大手メーカーとの激しいシェア争いの中で「原料に勝る製品なし」を合言葉に乳質の向上に努め、自前のプラントで品質本位の製品を開発することによって消費者に直接アピールする活動を推進し、それを通じて酪農収益の向上を図り、地域の振興に大きく寄与してきたことが評価されました。

優れている点の第1は、あくまでも消費者を直接対象とした販路を確保するために、生協との提携に併せて宅配ルートを維持・発展させてきたことであります。

大手メーカーをはじめほとんどの乳業メーカーが紙容器による量販店を通じた販売にシフトする中で、「本物で安全・安心な牛乳を直接消費者に」といった理念を

◆畜産大賞

地域振興部門

「酪農家の心を食卓へ」
―生産から販売まで―　鳥取県東伯郡東伯町　大山乳業農業協同組合（代表：福田　信一郎）

◆最優秀賞

経営部門

「『低コスト化』追求で安定経営を築く子牛生産」
―楽しい牛飼い人生を息子たちに―　鹿児島県曽於郡大崎町　藤岡　敷雄・藤岡　美江子

指導支援部門

「町のリーダーシップで進む指導支援と多様な仕組みづくり」
―顔の見える農家小グループが担う飼料イネによる耕畜連携―
宮崎県東諸県郡国富町　宮崎県国富町（代表：上杉　哲夫）

地域振興部門

「酪農家の心を食卓へ」
―生産から販売まで―　鳥取県東伯郡東伯町　大山乳業農業協同組合（代表：福田　信一郎）

研究開発部門

「新規遺伝子増幅法（LAMP法）による牛受精卵性判別キットの研究開発」
北海道立畜産試験場　遺伝子診断応用研究グループ（代表：陰山　聡一）

◆優秀賞

経営部門

「『土、草、牛』と我が家の経営」
―大地に生きる21世紀の酪農―　福島県西白河郡西郷村　阿部　弘・阿部　フミ子

指導支援部門

「夢を実感でき、地域を活性化する肉牛経営を育む」
北海道三石郡三石町　三石町和牛センター（代表：村井　兵作）

地域振興部門

「みんなで育てたおいしい低温殺菌牛乳」
―生産者・消費者と一体となった本物志向の製品開発―
群馬県新田郡新田町　東毛酪農業協同組合（代表：大久保　克美）

研究開発部門

「搾乳ユニット自動搬送装置の開発」
搾乳ユニット自動搬送装置開発チーム（開発グループ代表：平田　晃、実用化グループ代表：太田　哲郎）

堅持して宅配販売ルートの開発・拡大に一貫して努力し、現在では、関東一円から中四国、北九州にまで販売網を広げ、製品販売高の41％を宅配が占める状況を作り出しています。しかも、このうち牛乳販売高の52.5％がリユースを基本とした瓶容器によるものです。生協取引も昭和45年の京都生協を出発点として他の生協にも広がりをみせ、現在では製品販売高の26％が生協扱いで、これに宅配を合わせると製品販売高の３分の２を上回っています（平成14年度実績）。

優れている点の第２は、一貫して品質にこだわった独自製品の開発に努め、「白バラ牛乳」を主力商品として西日本では知らない人がいないほどの「白バラ」印の一大ブランドを確立したことであります。

量販店販売に比較して割高になる宅配による流通コストを吸収するには、品質向上による製品の差別化が有力な手段になります。そのために、乳脂率と無脂固形分率、細菌数と体細胞数を組み合わせた独自の「乳価テーブル」（乳質による格差単価）を設定し、徹底した乳質改善指導を実施することによって、組合員別検査結果の年間出荷乳量による加重平均値で乳脂率3.95％、無脂固形分率8.8％、細菌数7.6万個／mℓ、体細胞数20.3万個／mℓ水準の高品質生乳生産を実現しています（平成14年度実績）。

こうした生乳を原料に牛乳・乳製品からケーキ類に至るまでの数多くの製品を生み出し、付加価値の増大に努めるとともに扱い商品のアイテムを増やすことによって宅配販売システムの安定化を図っています。

優れている点の第３は、以上の事業活動の成果として、組合員にこれまで一貫して出資配当と事業利用分量配当を実施し、酪農経営の安定化を図ってきていることです。

出資配当は最高時で７％、しかもこの水準を昭和50年度から平成４年度まで18年間続けており、事業利用分量配当も最高時出荷牛乳１kg当たり８円で、ちなみに３円以上の年度を拾ってみると、昭和44年度以降、最近年度までの34会計年度のうち、半分以上に及んでいます。

配当はここ１、２年低下・減少してきているものの出資に対して１％、事業利用分量に対して0.5円を維持しています。

組合員はそれぞれの地域で中核農家の役割を果たし、転作水田を活用した飼料生産組合を組織するなど地域農業の展開に大きく寄与しています。

優れている点の第４は、消費者との交流を継続的に発展させてきていることです。生協と共同出資で「CO-OP牛乳産直交流協会」を設立し、「大山まきばミルクの里」を開設したり、大学生を対象にファームステイによる体験学習を目的とした「大山インターンシップ」を発足させるなど、これに「大山まきば祭」などのイベントを加えて、多面的な交流を推進しています。

近年、「O157」や「BSE」だけではなくて、「食」の生産・流通現場での意図的な「偽装」その他、「食」の安全と「食」の生産・流通の担い手に対する信頼が大きく損なわれる不祥事が残念ながら相次いでいます。こうした社会的な状況の中で、「本物で安全・安心な牛乳を直接消費者に」といった理念を基本に、一貫して生産者と消費者の「共利・共生」を追求してきた大山乳業農業協同組合の活動の今日的意義はきわめて大きなものがあります。「畜産大賞」に値すると評価された根拠もまさにこのところにあります。

続いて、その他の部門の最優秀賞受賞事

例についてであります。経営部門の藤岡数雄・藤岡美江子夫妻による「『低コスト化』追求で安定経営を築く子牛生産－楽しい牛飼い人生を息子たちに－」は、鹿児島県の大隅半島北東部に位置するシラス台地上の畑作地帯にあって、後継者を含めて３人の家族労働力で成雌牛90頭を飼養する経営であります。

昭和41年に現経営主の藤岡数雄氏が農業高校卒業と同時に後継者として就農し、昭和51年に先代から経営委譲を受けて初めて繁殖牛を導入、その後、飼料作面積と飼養頭数規模を並進的に拡大しながら、舎飼いによる独自の省力的な生産技術体系を作り上げ、低コスト高収益の子牛生産経営を確立して現在に至っています。

この経営の優れている点は、①超早期離乳・ロボット哺育による子牛育成技術、成雌牛全頭全期間１日１回飼料給与による昼間分娩技術、ロールベール方式によるサイレージの通年給与等の先進技術を積極的に導入し、発育段階、繁殖サイクルに合わせた牛群管理を徹底することによって大幅な省力化を実現していること、②省力化と相まって畜舎施設のほとんどを手作りし、価格を抑えた基礎牛導入と自家産牛主体の拡大によって、低コスト生産を実現していること、③子息に経営主世帯と収支を分離した牛群を所有させ、一連の技術体系に基づいて作業を分担し所有区分の枠を越えて一括管理することによって、後継者の育成・経営継承の方法としても有効な新しい家族間の協業体制を創出していることなどです。

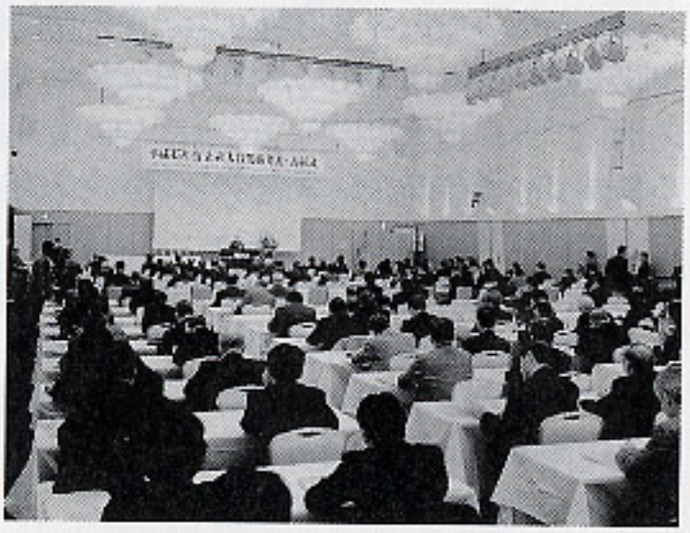
成雌牛年間１頭当たり飼料生産労働を含む管理労働時間48時間、子牛１頭当たり労働費を含む生産原価16.3万円、成雌牛１頭当たり年間所得18万円という成績はきわめて優れたものであると同時に、子牛の高価格化を追わずに市場平均水準を目安に低コスト化で収益向上を図ろうとしているところに新しい子牛生産経営のあり方をうかがうことができます。

次に、指導支援部門の宮崎県国富町による「町のリーダーシップで進む指導支援と多様な仕組みづくり－顔の見える農家小グループが担う飼料イネによる耕畜連携－」事例は、肉用牛経営の粗飼料確保、タバコ作跡地の土壌クリーニング、水田転作の推進といった課題への対策として町が主導して始めた飼料イネ栽培・利用の普及推進活動の成果です。

平成８年に、まず情報収集から始めて試験栽培と試験給与を試み、平成９年に試作面積を拡大して効果を確認、平成10年に転作作物として認められたことを契機にＪＡや農業改良普及センターなどと連携して本格的な普及拡大に取り組んだ事例です。その後、平成12年に口蹄疫の発生もあって急速に普及、平成14年には栽培面積280haとなって栽培面積日本一の宮崎県内でも市町村単位でトップの地位を占める実績を上げるに至っています。

この事例は、推進体制に特徴があって、推進の主体はＪＡ、農業改良普及センター、畜産・耕種農家の代表によって構成される「国富町飼料稲生産振興会」で、その指導の下に栽培・利用組織としての１～２戸の畜産農家と近隣の数戸の耕種農家によって構成される耕畜連携農家グループが組織されています。

このグループは町全体で122グループあって、ここでそれぞれ供給契約が結ばれ、耕種農家が植え付けから収穫前までの管理、畜産農家が収穫・調整を分担することによって、飼料イネが栽培・利用される



多数の参集者で開催された業績発表・表彰式

仕組みになっています。

町は生産振興会を通して、耕種農家対象に飼料イネ種子の購入代金（全額）、苗代補助金（４分の１）、畜産農家に対してはサイレージ調製用の簡易ビニールサイロの購入代金（40％）などを助成して支援を行なっています。

耕畜連携農家グループは肉用牛の飼養頭数、飼料イネの栽培面積等で戸数は弾力的に構成されており、飼料イネの需給調整機能をも併せ持った組織、地域と経営の実情に即した組織として仕組まれています。耕畜連携のあり方として有効な１つのモデルを提示しているといえるでしょう。

最後に、研究開発部門の最優秀賞を受賞した北海道立畜産試験場遺伝子診断応用研究グループによる「新規遺伝子増幅法（LAMP法）による牛受精卵性判別キットの研究開発」についてです。この事例は検査薬メーカーの栄研化学㈱と連携して、栄研化学㈱が開発したLAMP法と呼ばれる遺伝子増幅法を活用して牛受精卵の性判別試薬キットの作成に成功し、簡便な手法で雄100％、雌95％という正確度の高い性判別を可能にした研究成果です。

PCR法と呼ばれる従来行われてきた遺伝子増幅法をベースにした各種キットによる場合に比較して必要な機器が安価であり、しかも判別に必要とする時間がおおむね半分、その上判定基準が数値化されていて簡明といった特長を持っています。ベースになっている遺伝子増幅技術などの関連技術は、いずれも国産の独自研究開発によるものであり、それらを組み合わせて作成された「性判別試薬キット」としては初めてのものです。簡易な装置、短時間の処理、性判別の確実性といった面から、今後急速に普及が見込まれる成果といえます。

以上、大賞と３つの部門の最優秀賞について、その概要と評価の根拠を簡単に説明させて頂きました。いずれの事例もそれぞれの部門において素晴らしい業績を上げ、大きな意義を持つ事例ばかりです。毎年度申し上げることですが、「大賞」はまったく異質な部門の最優秀賞の中から選ぶことになります。そこに審査上の大きな困難があるわけですが、日本畜産のおかれた現状と将来方向にてらして、大局的な観点から総合的な判断に基づいて、今表彰することの意味合いを考えて選ばせて頂きました。

時間の関係で省略せざるを得ませんが、最優秀賞に至らなかった各部門の優秀賞受賞事例、残念ながら選外となった事例も、それぞれの部門において優れた実績を持つ事例ばかりです。それらの事例を含めてその内容が日本全国に広まることによって、いささかでもこの表彰事業が日本畜産の前進に寄与することを願って、中央全体審査委員会と中央部門審査委員会を代表しての審査報告を終わらせて頂きます。

（くりはら　こういち・麻布大学名誉教授）

＜本稿は表彰式典の審査講評を編集部でまとめたものである＞